

I

次の文章を読んで、後の問い(問1～11)に答えよ。(配点 75)

香料

古代では、香料は宗教上の行事のときに使われた。人々は、神仏や天をキエツさせ、悪霊を追い払うためにサイダンに香料を焚いた。その後、香料は貴族の嗜好品となり、しだいに一般に広がっていった。古代エジプトでは、人々は体に香油を塗り、衣服に香を焚きしめ、女性は香料入りの水で沐浴した。クレオパトラは、高価な香料をふんだんに使ってあやしい魅力を誇っていたのであって、じつはたいした美人ではなかったという説もある。

現在使われている香料の原料は、動物性香料、植物の抽出物、それに合成香料である。動物性の香料としては、ジャコウジカ、マッコウクジラ、ビーバー、ジャコウネコ(シベット)からとれるジャコウ系の四種類の香料が使われている。

ジャコウジカのオスの腹部には分泌腺があり、ゼリー状のムスク(ジャコウを意味する)を分泌する。交尾期にはムスクを分泌し、メスを引き寄せる。つまり、ムスクは、オスが分泌しメスを引き寄せる性フェロモンである。オスが出す性フェロモンであるためかどうか知らないが、ムスクは男性用化粧品に欠かせないものである。

大部分の香料は、植物由来である。植物香料の原料としては、果実、種子、根なども用いられるが、花が圧倒的に多い。それぞれの花の特徴的な香りは、どのような成分に由来するのであるだろうか。花の特徴的な香りが、比較的少数の成分で決定されている例もある。たとえば、ハッカの香りの主成分はメントールであり、ジャスミンの香りの主成分は、ジャスモン、ジャスモン酸メチル、ジャスミンラクトンである。ウメ、サクラ、モモはいずれも同じバラ科のサクラ属に属するが、その香りもよく似ている。三者の花には共通してベンズアルデヒドとベンジルアルコールが含まれている。

このように、比較的少数の成分が花の香りの主役である場合もあるが、多くの花の場合ももっと複雑である。ラベンダーの花には、約三〇〇種の芳香成分が含まれている。微量でも強く匂うもの、多量にあっても弱い香りしかないものがあるので、ガリヨウの多いものがラベンダーの香りに重要とはかぎらない。どの成分がラベンダーの香りにもどのように寄与しているかを決めるのは、ひじょうにむずかしい。化粧品には、ラベンダーの抽出物そのものを使う場合もあるが、いろいろな芳香成分を組み合わせるラベンダー様の香りをつくることがおこなわれる。この場合は、天然のラベンダーと同じ成分を使う必要はなく、ラベンダーに含まれていない芳香成分も使う。どういう成分をどのように組み合わせるとラベンダーの香りになるかは、調香師(パーヒューマー)の腕(鼻?)の見せどころである。

香料の最大の用途は、食品フレーバーである。年々加工食品が増えているので、今後ますます食品用に使われる香料が増加するものと思われる。香料はまた、動物の餌にも使われる。子ウシや子ブタをなるべく早く母親から離すと、母親のつぎの受胎が早くなり効率的である。このため、バター、チーズ、ミルク様の香りをたくみにブレンドしたウシ・ブタ用の人工乳が開発されている。

ついで用途が大きいのは、化粧品香料である。このなかには、化粧品、石鹸、洗剤、浴剤、室内芳香剤などが含まれている。かつては、香料は化粧品に使われるというイメージが強かったが、化粧品に使われる香料の量はむしろ横ばいであり、香料全体のなかでの使用割合は年々減少傾向にあ

る。

調香師

調香師になるためには、それなりの訓練が必要である。まず、いろいろな単品の香りを、かたづけしからかき、その香りを覚える。一〇〇〜三〇〇種類ぐらいの香りを覚えなければならないという。こうしていろいろな香りをかいでいると、それだけいろいろな香りを識別できるようになる。これは、嗅覚器のセンサー機能がよくなるという意味ではない。香りに対する記憶量が増すので、

ア

ということである。

単品の香りを覚えたら、ラベンダーのエキスとか、バラのエキスといった混合物の香りを覚える。こうした訓練をした後、いろいろな香りを組み合わせたらどういう香りができるかを学んでいく。調香師には、嗅覚の感度が特別いいということが要求されるのではなく、むしろたくさん香りを記憶し、センスのいい香料をつくり出す能力が要求される。

香道

日本人が香りを楽しむ習慣は、もともとは中国から伝来してきた。大和時代には、仏様へ香をさげたり、衣服のなかに匂い袋をしのばせることがおこなわれていた。平安時代になると、香木や香脂をたいて室内にくゆらせたり、衣服にたきこめ（移香）たりした。また、このころから、貴族のあいだでは自分の配合した香りを競いあう香合わせがおこなわれた。

その後は、こうした配合した香りに飽きたらず、もともと貴重なものとしていた沈香木が愛用されるようになった。沈香木は、東南アジア各地の常緑樹の幹にまれに見られるもので、幹に香りのある樹脂が沈着したものをいう。沈香木をたくとミョウコウがたちのぼるので、香火鉢に沈香木を入れ香りを楽しんだ。

室町時代になると、香道が確立された。香道では、香火鉢に入れたいろいろな沈香木の香りを「聞き」、その香りを記憶しておく。つぎに、ちがう順序で回ってきた沈香木の香りを「聞き」、これが先に「聞いた」どの香りであるかを当てるのである。茶道と同じように、礼儀正しく優雅におこなわれる。忙しく動きまわっている現代人には、想像もつかないほど優雅に香りの世界を楽しんでいたのである。もともと、香道の流儀は、レンメンと現代にも受け継がれており、いまでも各所で香会が開かれているとのことである。

甲

味の場合は、個々の味がそれぞれ生物学的な意義をもっているが、匂いの場合には、個々の匂いの役割は明確ではない。ヒトにおける匂いの役割を考える前に、動物における匂いの役割を考えてみる。匂いのなかで生物学的な意義がもつとはっきりしているのは、フェロモンである。フェロモンには生体行動のソクシン、仲間どうしのコミュニケーション、集団行動の調節などはっきりとした生物学的な役割がある。フェロモンだけではなく、動物はいろいろな匂いを生きるための手段として活用している。ミツバチのように花を探し求める昆虫は、花の匂いに誘引され、腐ったもの好きなハエは腐敗物の匂いに誘引される。野生動物は、餌を探したり、外敵の存在をキャッチした

り、自分のなわばりを確保するために嗅覚を利用している。

それでは、ヒトの場合はどうか。ヒトは視覚の発達している動物であり、外界からの情報、主として視覚によって得ている。そういう意味では、ヒトの場合は、嗅覚が生死を左右するほどの役割をはたしているわけではない。だからといって、ヒトにとって嗅覚が重要でないわけではない。豊かな人間生活を送るためには、嗅覚はなくてはならない感覚である。

匂いの好き嫌いは、民族によりかなりちがう。多くの日本人は、海苔、納豆、線香、ヒノキなどの匂いを好ましいと感じるが、欧米人にはこうした匂いが嫌いな人が多い。逆に、日本人には、匂いのきつい外国の料理を嫌いな人が多い。日本人と欧米人のあいだで、嗅覚の機能にとくにちがいはないので、匂いの好き嫌いは生活習慣の違いに由来していることになる。

これに対して、花の匂いは万国共通に好まれる。なぜ、花の匂いは、みんなに好かれるのだろうか。受粉に昆虫を必要としないマツやスギのような風媒花には匂いがながい、昆虫に受粉の仲立ちをしてもらう植物の花は、匂いか色で昆虫を引きつける。大型で鮮やかな色をもった花は、色で昆虫を引きつけるので弱い匂いしか出さないが、薄い色の花は強い匂いを出して昆虫を引きつける。

このように花の匂いは、昆虫にとっては I な匂いであるが、だからといって、花の匂いがヒトにとっていい匂いであるという理由にはならない。イヌやサルは、花の匂いをとくに好きではない。赤ちゃんにバラの花の匂いと糞臭をかかせても、バラの匂いに特別の関心をしめさないし、糞臭をとくにいやがらない。こう考えてくると、花の匂いが好きなのは、II なものではなく、学習効果によるものと考えたほうがいい。バラの花の匂いが好きなのは、美しいバラの花を連想するからであろう。

(栗原堅三『味と香りの話』岩波書店1998年)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～f のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は 1 ～ 6 。

a キエツ

1

b サイダン

2

c ガンリョウ

3

d ミョウコウ

4

e レンメン

5

f ソクシン

6

問2 空欄

I

II

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑨のうちからそれぞれ一つ選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。空欄Iの解答番号は

7

、空欄IIの解答番号は

8

- | | | |
|-------|-------|-------|
| ① 誘惑的 | ② 視覚的 | ③ 友好的 |
| ④ 人間的 | ⑤ 先天的 | ⑥ 個別的 |
| ⑦ 野性的 | ⑧ 集団的 | ⑨ 象徴的 |

問3 空欄

A

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

9

- ① 多人数を誘惑する芳香を生成できる
- ② 種々様々な芳香成分を認識できない
- ③ 他者に芳香成分をうまく認識させる
- ④ 芳香成分を識別させることができる
- ⑤ 芳香成分の分量をうまく調整させる
- ⑥ 脳内での香りの識別機能がよくなる

問4

傍線部A「多くの花の場合ほもつと複雑である」の理由として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

10

- ① 例えばラベンダーのように、花の香りに寄与する物質を化学的に発見できないから。
- ② 多くの花においてどの成分が特徴的な香りの由来か特定するのが困難であるから。
- ③ 花の芳香を印象づける物質は、比較的少数の成分が複雑に絡み合っているから。
- ④ ラベンダーの香りに寄与している成分を調香師が直感的に決定できないから。
- ⑤ 多くの花の香りを決定づける成分は、一つしかないことが明白であるから。
- ⑥ 花の芳香成分を一つに決定することは、調香師には荷が重い仕事だから。

問5 傍線部B「調香師（パーヒューマー）の腕（鼻？）の見せどころ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 調香師は、ラベンダーの抽出物の一部を必ず使用して、どれだけ本物の香りに近づけることができるかという能力が必要とされているということ。
- ② 本物のラベンダーの香りにとこまで近づけることができるかというのは、組み合わせる成分を選択する調香師の嗅覚の感度に左右されるということ。
- ③ 効果的な香りを作成するために何を組み合わせるかというのは、ひとえに調香師が記憶する香りの質によって決定されるということ。
- ④ 食品加工に使用される香料は減少傾向にあり、この状況を回復させるために調香師が持つ嗅覚の鋭さが強く求められているということ。
- ⑤ たとえ複雑な香りを放つ花であっても、調香師にはその主成分となる物質を突き止める責任があるということ。
- ⑥ 調香師には、ラベンダーに含まれている芳香成分を用いる、用いないにかかわらず、ラベンダーの芳香に極力近づける能力が必要とされているということ。

問6 傍線部C「くゆらせ（る）」の本文中の意味として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 複数の香木を使い複雑な香煙にする
- ② 香煙を緩やかに立ち上らせる
- ③ 香道によって高貴な室内を演出する
- ④ 沈香木のみを燃やし移香する
- ⑤ 香煙を立てて人々を和ませる
- ⑥ 断続的に香煙を立てて香りを作る

問7 傍線部D「個々の匂いの役割は明確ではない」の理由として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

13。

- ① ヒトの場合、生活を豊かにするために嗅覚は必要なものであるが、各人の生活習慣によって匂いの好き嫌いは左右され、動物のようにはっきりとした生物学的な意義はないから。
- ② 動植物における匂いは生活と密着した不可欠な感覚ではあるものの、視覚を中心とした生活を送る動植物にとって、匂いは生物学的な観点から役に立たないとされているから。
- ③ ヒトは匂いの好みが異なるために生活習慣は一定するが、生物学的な観点から匂いを生活に活用する動物の生活は常に変化するから。
- ④ 匂いは生物学的な意義があるとはいえないものの、ヒトによって嗅覚は異なり、生活スタイルによって匂いの生物学的な役割も変化するから。
- ⑤ ヒトは様々な芳香成分を生活における一つの安らぎを得る手段としているために、個々の匂いの生物学的な役割を明確にはできないから。
- ⑥ 植物成分の中には量の多寡によって匂いの役割が変わるものがあるが、それと同様に、動物が発する匂いの役割も状況によって変化するものであるから。

問8 傍線部E「ヒトの場合は、嗅覚が生死を左右するほどの役割をはたしているわけではない」

の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 動物は様々な匂いを生きるための手段として活用しているが、ヒトは周囲の情報を主に視覚から得ており、動物ほど生活の中で嗅覚を活用していないということ。
- ② ミツバチのように花を探し求める昆虫は花の匂いに誘引され食糧を確保するが、ヒトは花の匂いを利用して危険を回避しており、嗅覚の活用方法が両者で異なるということ。
- ③ 動植物はフェロモンを仲間どうしのコミュニケーション、集団行動の調節など生活の中で利用するが、ヒトは言語を用いて行動するので、動植物ほど嗅覚を活用しないということ。
- ④ ヒトにとって嗅覚は豊かな人間生活を送るために必要な感覚であるが、動植物ほど生死に直結するような能力を有していないということ。
- ⑤ すべての動植物は自分のなわばりや食料を確保するために嗅覚を利用しているが、ヒトは衣食を確保するために嗅覚を利用していないということ。
- ⑥ 動物における匂いは生物学的な観点から生死にかかわる役割を果たすが、それと同時に動植物はヒトの場合と同じく視覚を生活の中で利用しているということ。

問9 傍線部F「花の匂いは万国共通に好まれる」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 花の匂いが好まれるのは、どの国にあっても変化することのない香りとされているから。
- ② 花の匂いが好まれるのは、人・動植物を引きつけるフェロモンを有するものであるから。
- ③ 花の匂いが好まれるのは、どの国の赤ん坊であっても興味を持つという事実があるから。
- ④ 花の匂いが好まれるのは、その花の芳香によって、その美しい花がイメージされるから。
- ⑤ 花の匂いが好まれるのは、美味しい食事を演出する際の必須道具として活用されるから。
- ⑥ 花の匂いが好まれるのは、どのような昆虫も引きつけるフェロモンを誘発しているから。

問10

空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は 16。

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 匂いの好き嫌いは学習効果
- ② 花の匂いは昆虫をまどわす
- ③ 昆虫をまどわす芳香の成分
- ④ 昆虫を誘引する植物の香り
- ⑤ 昆虫を誘引する植物の役割
- ⑥ 乳児が反応する植物の匂い
- ⑦ 乳児が反応する食事の分量
- ⑧ ヒトが好む匂いの善し悪し^あ

問11

本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

17

18

- ① 食品用に使われる香料が今後も増加すると思われる一方で、バター、チーズ、ミルク様の香りをたくみにブレンドしたウシ・ブタ用の人工乳が開発されるなど、香料は動物の餌にも使用されている。
- ② 現在使われている動物性香料には、ジャコウジカ、マッコウクジラ、ビーバー、ジャコウネコからとれるジャコウ系の四種類の香料が使われており、なかでもジャコウジカのオスの腹部から分泌されるゼリー状のムスクは、男性用化粧品に欠かせないものである。
- ③ 腕のいい調香師になるには、三〇〇種類にも及ぶ様々な食品の香りを暗記し、香りを識別する能力を鍛錬する必要がある、さらには食品それぞれの中心となる香料を決定するだけの能力が必要であると一般的にいわれている。
- ④ 香道では、香火鉢に入れた香木の香りを「聞き」、これが先に「聞いた」どの香りであるかを当てることがおこなわれるが、香道が伝来した室町時代では多忙な現代人からは想像もつかないほど優雅に時間をかけて香りの世界を楽しんでいた。
- ⑤ 受粉に昆虫を必要としない風媒花に匂いはないが、昆虫による受粉を必要とする植物の花は、昆虫を引きつけるための匂いを放っており、これはヒトを魅了するものとして存在している。
- ⑥ 一般的な日本人が楽しむ香道は、衣服のなかに匂い袋をしのばせていた平安時代に端を発するが、室町時代に貴族たちが香木や香脂をたいて室内で楽しむようになると、香道は限られた貴族たちの楽しみになっていった。
- ⑦ 例えばミツバチのように花を探し求める昆虫は花の匂いに誘引され、腐ったものが好きなハエは腐敗物の匂いに誘引されるなど、豊かな生活を送るために、昆虫は様々な匂いを利用している。
- ⑧ 古代において香料は宗教上の道具として使用されていたが、時代が下り一般の人々にも使用されるようになると、宗教的な色彩は薄くなり、単にあやしい魅力を醸し出す一つの道具となった。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い(問1～12)に答えよ。(配点 75)

甲

もし今日、ヒットした歌謡曲の和声進行をそのまま流用したり、あるいは同じ歌詞とメロディーに少し和声のアレンジを加えただけで新曲を作ったのがロケン^aしたら、盗作で訴えられることは間違いない。だがまさにこれこそが、中世の人々にとつての作曲行為だった。当時はまだ、

ア

はほとんどなかった。「曲を作る」とは^(注1)グレゴリオ聖歌に何かを少し加える

(飾る)、つまりそれを編曲することだったのである。この聖歌編曲が、オルガナムと呼ばれるジャンルである。これは中世における美術の状況とよく似ている。つまり当時は、絵画といえほとんど宗教画と同義で、描かれる主題は——受胎告知やキリストの磔刑^{たげ}やアダムとイヴの楽園追放など——聖書に取材した場面ばかりであつて、しかも主題ごとにそれを描く構図は前もつてほとんど決められていた(受胎告知なら、マリアの前に天使が立ち、その傍には処女性をあらわすユリが描かれる等)。ここには画家のオリジナリティが入り込む余地などほとんどなかったのである。

とはいえ、単なる型の再現だけでは次第に物足りなくなってくるのが、芸術家の習性である。中世の音楽家たちも、グレゴリオ聖歌を飾るだけではだんだん満足できなくなつてきて、少し「新しい」ことがやつてみたくなりはじめたに違いない。まず時代が下るにつれて、グレゴリオ聖歌がオルガナム声部(新しく加えられた声部)より下に置かれることが多くなる。つまり最初は上に置かれたグレゴリオ聖歌を飾るものだったオルガナム声部の方が、曲の主眼になつてくるのである。

I

「I」といってもいいし、グレゴリオ聖歌は次第に曲を作るための「口実(だし)」になりはじめたといつてもいいだろう。また最初は影のように同じ歩調でグレゴリオ聖歌に寄り添つていたオルガナム声部が、一一世紀末から一二世紀初頭になると、かなり独立した動きをするようになる。聖歌の旋律と逆の方向に動いたり(専門用語でいえば反進行である)、長く引き延ばした聖歌の上に細かい装飾的な旋律がつけ加えられたり(メリスマ・オルガナム)するようになるのだ。これらはとりわけ一二世紀に入つて生じてきた出来事である。

乙

中世のオルガナム芸術の頂点を成すノートルダム楽派は、時代的には教会権威の絶頂期と重なつている。一〇九九年には第一回十字軍がエルサレム奪還に成功し、一二世紀において教会は、王をも凌ぐ^{しの}絶大な力を手にした。かつての人里離れた修道院における

II

な宗教活動は徐々に

過去のものとなり、宗教者たちは人々に自らの権力を誇示するようになる。この時代、フランス各地では続々とゴシック教会が建築される。天にも届かんばかりの尖塔^{せんとう}、入り口を埋め尽くす彫刻群、そしてこの世のものとも思えないステンドグラスの不思議な色彩——それは地上に再現された神の家だった。最初期のゴシックといわれるパリのサン・ドニ教会が一三七一四四年、シャルトルが一一九四—一二二〇年、アミアンが一三二〇—七〇年、そしてパリのノートルダム大聖堂がほぼ完成したのが一二五〇年。そしてこのノートルダム大聖堂を中心に展開したのが、ノートルダム楽派の音楽だったのである。

ノートルダム楽派はレオナンとペロタンという二人の「作曲家」の存在によつてつとに知られる

〔作曲家〕とカッコつきで書いたのは、彼らが果たして近代的な意味での作曲家であったかどうか
が疑わしいからなのだが。一二世紀後半に活動したレオナンは、さまざまな教会儀式（ミサ等）
のためのオルガナムを体系的にまとめ（《オルガナム大全》）、一二世紀末から一三世紀初頭にか
けて活動したペロタンは、これらのオルガナムをさらに大規模に改編したといわれる。これらのオル
ガナムはドイツやイタリアやスペインにも写本が残っており、一三世紀末まで歌われていたことが
分かっているから、彼らの作品が当時いかに絶大な名声を誇っていたか察せられよう。

レオナンとペロタンの作品を聴き比べてみれば、ゴシックの時代にオルガナム芸術がどれほどの
飛躍的發展を遂げたか実感できるはずである。右に述べたように、ペロタンのものとされる作品の
多くはレオナンの改作だから、比較するには格好の素材である。まずレオナンの曲は二声のごく繊
細なもので、引き延ばされたグレゴリオ聖歌の上に、宙をタダヨウタダヨウのようなオルガナム声部が細かく
飾られるメリスマ・オルガナムである。それに対してペロタンの曲は、比較にならないくらいに規
模が大きく、ほとんど「中世のシンフォニー」と呼びたくなるほどだ。編成は四声へと拡張され、
低音で轟とどろくグレゴリオ聖歌は巨大な石柱を思わせる。そしてその上にリズムミカルなオルガナム声部
がのせられるのだが、これは今の感覚でいえば八分の六拍子に聴こえるだろう。

ペロタンの曲のこの舞い踊るようなリズムは、この時代あたりからようやく、音高だけでなく音
の長さ（リズム面）もある程度表記できる楽譜システムが考案されたことと、密接に関係している
（これはモード・リズムと呼ばれる）。おそらくそれまでの音楽は、まだまだ言葉から完全に独立し
てはおらず、したがって歌詞を適切な抑揚で唱えていればおのずとしかるべきリズムになるとい
うような性格のものであったはずだ。だからこそ、それまでの人々は、あえて音の長さを楽譜として表
記する必要性を感じなかったのだろう。要するにお経などと事情は同じであって、わざわざ音符で
書かずとも、言葉の抑揚が自然に適切なリズムを導いてくれるのである。しかるにペロタンの時代
から初めて、音楽は イ、音楽固有の時間分節の法則（リズム）を追求するよ
うになった。だからこそ、音価（注二）をもできるだけ正確にキ（注一）フする必要が出てきたのである。これは音
楽が言葉から自立していくプロセスの、非常に重要な第一段階であった。

鳴り響く数の秩序

それにしてもペロタンらの曲は、今日の多くの人々にとって、まるで異世界の音楽のように響く
はずである。この違和感にはいくつか理由があるのだが、その最大ものは和声感覚の違いだ。わ
れわれにとって「和音」といえば、たとえば「ドミソ」のことであるが、中世においては「ドミ
ソ」は不協和音だった。つまり「ミ」が入っているとはいけなかったのである。ためしにピアノで
「ドミン」と「ドン」を弾き比べてみてほしい。柔らかい前者の響きに対して、後者はどこか尖とが
っていてまろやかさを欠く、空虚なものに聴こえるはずだ。だが中世の人々にとっては、この——近
代の和声法では「空虚五度」と呼ばれて禁則とされる——「ドン」の響きの方が「正しかった」の
である。つまり中世においては禁欲的で峻厳しゅげんでイカク（注三）するような響きこそが求められたのであって、
音楽は——われわれがついそう考えがちな——どこかしらカ（注四）ンビ（注五）な存在ではなかったであろう。

おそらくこうした音響が好まれた背景には、当時の人々の独得の音楽観があったはずである。こ

ここで中世の音楽美学について少し触れておこう。まず強調しておきたいのは、中世において音楽は、決して「音」を「楽しむ」ことではなかったという事実である。中世を通して広く読まれた理論書に、ボエティウス（四八〇？―五二四？年）の『音楽綱要』があるが、彼はここで音楽を三種類に分類した。まず「ムジカ・ムンダーナ（宇宙の音楽）」は四季の変化や天体の運行などを司る秩序のことで、これには非常に重要な意味が与えられていた。当時の人々にとって「本来の」音楽とは、何よりこの「世界を調律している秩序」のことであった。そして同様の秩序が人間の心身をも司っていると考え、これは「ムジカ・フマーナ（人間の音楽）」と呼ばれた。「音楽」によるこの調律作用が狂うと、病気になったり性格が曲がったりすると考えられたのである。そして実際に鳴る音楽（これこそわれわれが「音楽」と考えているもののだが）は「ムジカ・インストウルメンタリス（楽器の音楽）」と呼ばれ、これは三種類の音楽のうちの最も下位に置かれていた（ここには声楽も含まれた）。実際に鳴る音楽などいつでもよいものであり、「本当の」音楽とはその背後の秩序のことだとされたわけである。

こうした「音楽は聴くものではない（!）」という考え方の源流は、音楽を数学の一種と考える古代ギリシャにまで遡ることができる。その代表はピタゴラスであって、彼は数学者であると同時に、音響学者でもあった。弦の長さを半分になると一オクターヴ上の音が鳴るといった、音程比と弦の長さの比率関係を発見したのは彼である。古代ギリシャにおいてすでに音楽は、「振動し鳴り響く数字」であり、超越的な秩序（数学的比率）の感覚的なあらわれであった。おそらく中世において、そしてそれ以後も、真にその名に値する「音楽」（芸術音楽）とは、現象界の背後の客観的秩序を探索認識するという意味で、一種科学に近いものと考えられていたのだろう。たとえばヨハネス・アフリゲメンシスの『音楽論（デ・ムジカ）』（一一〇〇年頃）は、音楽家を「ムジクスⅡ理論を熟知している人」と「カントールⅡ理論なしにただ音楽をするだけの人」の二種類に分類している。中世の大学で教えられた自由七学科のうち、文法と修辞学と弁論術が基礎学科であったのに対して、音楽は幾何学や代数や天文学と並ぶより高等な数学的学問とされていたこともつけ加えておこう。音楽は快樂ではなく、科学や哲学に近いものだったのである。

このような中世の音楽観から考えて、ペロタンらの曲の背後にあったのは「神の国の秩序を音で模倣する」といった意図ではなかったかと思われる。少なくともそれが「人間が聴いて楽しむ」といったものでなかったことだけは確かだ。たとえばペロタンの曲が今のわれわれにはすべて八分の六拍子に聴こえることは右に述べたが、これにも神学的な理由があったようである。つまり当時の音楽はもっぱら、サンミイッタイをあらわす「三」拍子系で書かれたのである（一四世紀に入ってから二拍子系が導入されると、教会から「神への冒瀆」として大変な非難の声が上がった）。またわれわれにとつてまったく不可解にも思えるのが、低音に置かれたグレゴリオ聖歌である。これらのおそろしく引き延ばされて唸りをあげる音の振動を聴いて、それが聖歌だと分かる人などいないだろう。「聴いて分かりもしないものをなぜ？」と思うのが、近代人の音楽観のほうである。だが当時の人々にとつては、人間が聴いて聖歌をそれと分かる必要などなかったに違いない。耳で聴こえるものの背後に、神の秩序（聖歌）が確かに存在しているということこそが、彼らにとつては重要だったはずである。

音楽の背後に超越的な秩序を作りたがるこの傾向は、われわれがよくなじんでいる「クラシッ

ク」のレパートリーの音楽にとっても、実は無縁ではない。バッハが好んだ数の象徴、シェーンベルクの一・二音技法、あるいはバルトークの黄金分割等々。こうした西洋芸術音楽独得の数学的な思考法を端的にあらわしているのが、トーマス・マンの小説『ファウストゥス博士』の中の一節である。これは作曲家（モデルはニーチェだともシェーンベルクだともいわれる）を主人公にした長篇小説であり、そこでマンは登場人物の一人であるクレッチュマルという音楽教師に次のように語らせている。

音楽は「耳に訴える」、とはよく言われることですが、それは条件つきで、すなわち、聴覚は、他の諸感覚と同じく、精神的なものに対する補充的な中間器官、受容器官である、という限りで認められることに過ぎません。おそらく、とクレッチュマルは言った、聴かれず、見られず、感じられず、出来ることなら感性の、そして情念のヒガンで、純粹に精神的な領域で、理解され観照されることこそ、音楽のもっとも深い願望なのです。

（円子修平訳）

ちなみに一九四五年にシェーンベルクは、マンの七〇歳の誕生日を祝って、非常に複雑なカノン（《四声の無限のカノン》^{（注三）}）を献呈したが、これについて作曲者自身「ほとんど演奏不可能」と述べた。「音楽は必ずしも耳に聴こえる必要はない（ウ）」という特異な考えこそ、中世から現代に至る西洋芸術音楽の歴史を貫いている地下水脈である。

（岡田暁生『西洋音楽史―「クラシック」の黄昏』中央公論新社2005年）

（注一） グレゴリオ聖歌：ローマ・カトリック教会で用いられる、単旋律、無伴奏の宗教音楽。

（注二） 音価：各音に与えられた楽譜上の時間の長さのこと。

（注三） カノン：ある声部が歌い出した旋律を、後続の声部が模倣しながら追ってゆく楽曲の形式。またはその曲。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a ロケン

b タダヨ

c キフ

d イカク

e カンビ

f サンミイッタイ

g ヒガン

問2

空欄

解答番号は に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。

① 不即不離

② 主客転倒

③ 大胆不敵

④ 順逆一視

⑤ 会者定離

⑥ 自主独立

⑦ 意味深長

⑧ 逆取順守

問3

空欄

解答番号は に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。

① 理論的

② 理性的

③ 禁欲的

④ 強権的

⑤ 論理的

⑥ 合理的

⑦ 快樂的

⑧ 収奪的

問4

空欄

ア

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は **28**。

- ① はじめから編曲するという現実
- ② はじめから編曲するという価値
- ③ はじめから作曲するという帰結
- ④ ゼロから何か詞を書くという現実
- ⑤ ゼロから何か曲を作るという意識
- ⑥ ゼロから何か作詞するという動機

問5

空欄

イ

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は **29**。

- ① 言葉と完全に対立し
- ② 言葉と密接に結びつき
- ③ 言葉の抑揚から解放され
- ④ 音の長さをコントロールし
- ⑤ その歌詞と抑揚とが完全に乖離^{かいり}し
- ⑥ 歌詞を適切な抑揚で唱えていればおのずと自然なリズムになり

問6

空欄

ウ

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は **30**。

- ① 音楽はヒガンを超越した数的秩序だ
- ② 音楽は現象界の背後の数的秩序だ
- ③ 音楽は感覚的なものに対する補充器官である
- ④ 音楽は精神的なものを感覚化するだけで十分だ
- ⑤ 音楽は感覚的なものを精神化するだけで十分だ
- ⑥ 音楽は精神的なものを純化するだけでは不十分だ

問7 傍線部A「つとに」の本文中の意味として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は **31**。

- ① 特に
- ② 度々
- ③ 早晩
- ④ 公然と
- ⑤ 明確に
- ⑥ しばしば
- ⑦ 往々にして
- ⑧ 最近になって
- ⑨ ずっと以前から

問8 傍線部B「しかるに」の本文中の意味として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は **32**。

- ① ただし
- ② むしろ
- ③ まさに
- ④ 定めし
- ⑤ 思うに
- ⑥ ところが
- ⑦ ちなみに
- ⑧ それゆえ
- ⑨ したがって

問9 傍線部C「このような中世の音楽観」の説明として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 「ムジカ・フマーナ」こそが「本来の」音楽であるという考え方
- ② ボエティウスの考えた音楽理論こそが正統な音楽であるという考え方
- ③ 「ムジカ・インストゥルメンタリス」こそが真の音楽であるという考え方
- ④ 音楽は算術と深いつながりがあり、数学や科学の一種でもあるという考え方
- ⑤ 音楽は聴くものではなく、現象界の背後の客観的秩序を探求認識するものであるという考え方
- ⑥ 音楽は快楽ではなく、現実世界の根底にある数学的秩序を具現化するものであるという考え方
- ⑦ 『音楽論（デ・ムジカ）』を著したヨハネス・アフリゲメンシスが、音楽を「ムジクス」と「カントール」の二種類に分類したという音楽観
- ⑧ 弦の長さを半分にすると一オクターヴ下の音が鳴るといった、音程比と弦の長さの比率関係を発見した古代ギリシヤの音楽家でもあったピタゴラスの音楽観

問10 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は 34 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① オルガヌム芸術の展開
- ② オルガヌム芸術の功罪
- ③ オルガヌム芸術の模倣
- ④ オルガヌム芸術と宗教画
- ⑤ オルガヌム芸術のリアリテイ
- ⑥ オルガヌム芸術のインパクト
- ⑦ オルガヌム芸術のオリジナリテイ
- ⑧ オルガヌム芸術とメリスマ・オルガヌム

問11 空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は 35 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① ゴシック建築とは
- ② ゴシック建築の誕生
- ③ レオナンとペロタンとの差異
- ④ レオナンとペロタンとの異同
- ⑤ ノートルダム楽派としてのペロタン
- ⑥ ノートルダム楽派としてのレオナン
- ⑦ ノートルダム楽派とゴシックの世紀
- ⑧ 教会の象徴としてのオルガヌム芸術

問12

本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

36

37

- ① 中世のオルガヌム芸術の絶頂期は、この世のものとは思えないステンドグラスで飾られた、パリのサン・ドニ教会やアミアン大聖堂、ノートルダム大聖堂を典型とするゴシック様式の教会が建築された時期と重なる。
- ② 「ムジカ・ムンダーナ」、「ムジカ・フマーナ」、「ムジカ・インストゥルメンタリス」の三つを独自の明快な音楽理論から区別したボエティウスは、「音楽は必ずしも耳に聴こえる必要はない」との考えから、中世においてオルガヌム音楽を飛躍的に発展させた。
- ③ バツハが好んだ数の象徴、シェーンベルクの黄金分割、さらにはバルトークの一二音技法などのように、われわれに親しみがある「クラシック」のレパートリーのなかにも、数学的思考法にもとづき音楽の背後に超越的な秩序を作ろうとする傾向は看取される。
- ④ オルガヌムと呼ばれるジャンルにおいては、描かれる主題が聖書に取材した場面ばかりの中世における宗教絵画と同様、作曲家のオリジナリテイが入り込む余地は皆無であり、現代では盗作と非難されても仕方がない、音楽的にもきわめて平凡なものであった。
- ⑤ 古代ギリシャの音響学者でもあったピタゴラスの影響を受けたボエティウスは、その著書である《オルガヌム大全》において、音楽を「ムジカ・ムンダーナ」、「ムジカ・フマーナ」、「ムジカ・インストゥルメンタリス」の三つに大別し、「ムジカ・ムンダーナ」こそ「本来の音楽」と考えた。
- ⑥ 一二世紀後半に活動したレオナンの作品を大規模に改編したペロタンらの曲に対して、現代の多くの人々が違和感を覚える最大の理由は、われわれにとって「和音」とされる「ドミソ」という柔らかい響きが中世においては「不協和音」とされ、「正しくない」とされたことに由来する。
- ⑦ トーマス・マンの『ファウストゥス博士』の主人公であるクレッチュマルによれば、音楽は「耳に訴える」のではなく、感覚的なものに対する補充的な中間器官であるという限りでのみ認められるに過ぎず、純粹に精神的な領域で、理解され観照されることこそ、音楽のもっとも切なる願望である、とされる。
- ⑧ 第一回十字軍遠征がエルサレム奪還に成功した時期に活躍したペロタンとレオナンの作品を比較すると、前者の曲がきわめて簡素なメリスマ・オルガヌムであるのに対して、後者の曲はほとんど「中世のシンフォニー」と呼びたくなるほど、前者のそれとは比較にならない大規模なメリスマ・オルガヌムにまで改編されたものである。